

主 題：旧約に見る神の救いのご計画 12

聖書箇所：創世記25-32章

きょうもまた旧約聖書から神様の救いのご計画について一緒に学びたいと思います。創世記25-32章までかなり長い章にわたり、途中で少し飛ばしていくところもあるかと思いますが、お許しいただきたいと思います。

神様の救いのご計画の中で、神様がアブラハムについてどのようなご計画を持っておられたのかを学んできました。創世記3：15原始福音と言われるエバの末からサタンの頭を砕く者が生まれるという預言から始まり、神様は人類に入った罪の赦しをどのように計画されているのかということをお私達は学んできました。アベルからエノク、そしてノアへと続いたヘブル書に記されている信仰の先輩たちがいるわけですが、あくまで神様は人類の中で個人的な信仰の持ち主を受け入れられました。そしてアブラハムに至って特別に民族として一つの種族をお選びになったことを見てきました。

1. アブラムへの祝福 創世記12：1-3

1) 神が示される地へ行け。

アブラムは75歳、サラが65歳の時に、神が示される地、すなわちカナンカナンの地へ行けという命令を受けます。彼はまだその行き先がどこであるかをはっきりと知りませんでした、彼は旅立っていきます。

2) 大いなる国民とする。

「国民」というのは「領土」と「民」ということばの合わさったものですが、すなわちアブラムから民族が生まれるということをおここで約束されたのです。

3) あなたの名を大いなるものとする。

そしてアブラムの名前、そのものが大いなる者となる。彼は信仰の父として神の友としてその名をうたわれるようになりました。

4) 地上のすべての民族はあなたによって祝福される。

アブラムの民族以外のすべての民族は彼の名によって祝福となるとされました。

2. アブラムの心配ごと 創世記15：1~

アブラムは恐れた、心配したと言うことばは悪いのですが、神様は恐れるな、私がおあなたの盾となると言われました。

3. 信仰の義認と神の契約 創世記15：6

そして彼は神様のことばを信じ、神はそのアブラムのことばを見て、その信仰を義と認められた。信仰義認というのがここで記されています。そして神様はそこで契約をされた。

4. アブラム、アブラハムへ 創世記16-17章

またアブラムは名前をおアブラハムと変え、やがて子どもが生まれるという約束をお与えられます。ところが5年立っても約束の子どもが生まれません。アブラハムとサラは神様の約束の時を待たないで、自分たちの手段でひとりのお子どもをお得ようとエジプトの女奴隷をおアブラハムに与え、そこで生まれたのがイシュマエルでした。けれども、それは約束の子どもではありませんでした。

5. イサクの誕生と結婚 創世記18-22章、24章

神様はやがてサラが90歳、アブラハムが100歳の時にひとりのお男子、イサクをお与えられた。

そしてアブラハムはイサクが40歳になった時に彼に嫁をとらせようと考えます。お母さんのサラはその3年前に亡くなっていて、イサクは非常に寂しそうにしていたのでしょうか、しもべの中でも最年長の、全財産をお管理させている最も信頼の置けるしもべをお呼び寄せて、アブラハムとサラの「生まれ故郷」へ行ってイサクのために嫁を見つけて来いと命じます。そして、しもべはそこでひとりのお女性リベカをお見つけて連れ帰ってきました。創世記24：62を見ると、ある夕暮れ、イサクが散歩に出かけた時、ふと目を上げて見ると、らくだの群れが近づいて来た。らくだにはリベカが乗っていて、リベカも目を上げてひとりのお男性が近づいて来るのを見ると、らくだから降りて「あれはどなたですか？」としもべに聞きます。しもべが「あの方が私の主人です。」、あなたのお夫となるべきお方、イサクさんですと答えます。すると「リベカはペールを取って身をおおった。」とあります。これは当時の習慣として女性が結婚するまで相手の男性に顔を見せないというしきたりを表していると言われている。そのようにして結婚相手であるイサクをお確認したということおです。しもべはイサクに一部始終をお告げ、イサクは母サラの天幕にリベカをお伴っていき、彼女をお妻とした。「彼は彼女をお愛した。」というところで24章は終わっています。

I. イサクに子どもたちが与えられる 25章

1. イサクの祈り 19-26節

二人は結婚しますが、リベカにも子どもが生まれなかったと聖書に記されています。20年間妻のリベカには子どもはできませんでした。そこでイサクは祈るのです。25：21節を見ると「妻のために主に祈願した。」と書いてあります。それで「主は彼の祈りに答えられた。それで彼の妻リベカはみごもった。」と記されています。ところが通常の妊娠ではなくて、お腹の中で赤ちゃん同士がぶつかり合うと記されています。それで彼女は心配して、神様にみこころを求めに行くということが記されています。その時に神様が言われたことは「二つの国があなたの胎内にあり、二つの国民があなたから分かれ出る。一つの国民は他の国民より強く、兄が弟に仕える。出産の 때가満ちると、見よ、ふたごが胎内にいた。」(23-24節)、お腹の中で押し合っていた子どもはふたごで、ふたりの男の子が生まれ出てくるのです。最初に出てきた男の子は全身が赤くてからだじゅうがまるで「毛衣のようであった」、毛がいっぱい生えていたと言うのです。「それでその子をエサウと名づけた。」とあります。その後、弟が出てきたけれども、先に出てきたエサウのかかとをつかんでいたのです、その子をヤコブと名づけたとあります。イサクは彼らを生んだとき60歳だったと聖書に記されています。エサウという名前は、ヘブル語でアードム(赤い)とセーアール(毛深い)というふたつの意味を持っていると言われていています。一方ヤコブの方は「押しつける」、「つかむ」という意味を持ったアーケブということばから来ています。また「策略に長けた」という意味も持っています。ホセア12：3-4に生まれる前から「兄弟を押しつけ」ていたとありますから、既にヤコブはエサウに対してこういう態度をとっていたことを聖書から教えられます。

2. 子どもたちの成長 27-34節

さて、子どもたちが成長して、彼らはどうなったかと言うと、「エサウは巧みな獵師、野の人と」なると記されています。一方ヤコブは穏やかで天幕に住む人となった。「野の人」というのは「乱暴な」とか「粗野な」という意味です。そしてヤコブは「穏やか」、「完全な」とか「欠けのない」という意味を持っていると言われていています。「天幕に住む人」というのは、羊を飼う、動物を飼うという仕事についている人で、「野の人」は獵師です。エサウとヤコブは全く正反対の状態成長していったということを見ることができます。一方はお父さんに愛され、弟のヤコブはお母さんに愛されたと。

そしてある時一つの出来事が起こります。25：29を見ると、「ヤコブが煮物を煮ているとき、エサウが飢え疲れて野から帰って来た。」とあります。彼は獵に出ていたのでしょう。疲れて帰って来た時にヤコブの煮物を見て彼は「どうか、その赤いのを、その赤い物を私に食べさせてくれ。」、お腹が減って死にそうだと言ったのです。赤い物、赤い物と言うので別名で「エドム」と言われたとここに記されています。エドム人というのが聖書に出てきますが、その名前の興りです。ヤコブは兄のエサウのその願いを聞いて、こう答えます。「今すぐ、あなたの長子の権利を私に売りなさい。」、一杯の食べ物の代わりに、長男として生まれたあなたの長子の権利を私に売れと言うのです。長男の権利というのはとても大変なもので、それは例えば財産を分与する時、ほかの子どもたちの二倍のものを得ることができるというので、一家の中でも本当に優先された立場にありました。また、初子はすべて聖別して神様に捧げるものであったと出エジプト13：2と12に記されています。エサウは「見てくれ。死にそうなのだ。」、長子の権利なんて今持ってもお腹を満たすことはできないから、なんとそこでその長子の権利と食べ物を交換しようということになったのです。ヤコブは必ずその長子の権はあなた、ヤコブに譲りますと誓うように言います。エサウはヤコブに誓って「長子の権利をヤコブに売った。」と記されています。そのような権利など何になるだろうかと「エサウは長子の権利を軽蔑した」——ばかにした。神様がとても大事な立場として与えた長子の権利を軽蔑したと記されています。レンズ豆の煮物とパンを食べたり、飲んだりしてお腹いっぱいになったのでしょう、これでもう十分だと言うわけです。まず肉の必要な必要が満たされることが一番大事で、そういった霊的なもの、特権は関係ないという態度をとったということをごここで教えられます。

ヤコブは非常に狡猾でした。名前も「策略に長けた」という意味を持っていましたが、まさにそうでした。お兄さんが生まれる時にかかとを持って離すまいとして、自分が先に生まれようとした。そこまで意識があったかどうかよくわかりませんが、そのようなことが実際に実現して、ここで見事に長子の権を得たということを見ることができます。

3. イサク、ヤコブを祝福する 27：1-29

そのような出来事があって、お父さんのイサクは段々と年をとってきて、27：1に「視力が衰えてよく見えなくなった」とあります。「息子よ。」と長男のエサウを呼んで「私は年老いて、いつ死ぬかわからない。」、もう死にそうだから、おまえは獵の道具を持って野に出て行って獲物をつかまえて、私の好きな料理を作って食べさせておくれ、そうしたら私は死ぬ前におまえに祝福できるからと言いました。エサウはそのことばを聞いて、獲物を捕まえに出かけて行きました。ところがその話をリベカが聞いていて、ヤコブを呼びます。「いま私は、父上が、あなたの兄エサウにこう言っておられるのを聞きまし

た。」、これこれこうで動物を獲ってきて私においしいごちそうを食べさせたら私はおまえを祝福するからと。だからヤコブよ、よくお聞き、あなたは羊の「群れのところに行って、そこから最上の子やぎ二頭を私のところを取っておいで。」、私がそれを料理しておいしいものを作ってあげよう。あなたはその料理を持ってお父さんのところへ持ってお行きと言うのです。でもお母さん、兄さんは毛深いのに「私のはだは、なめらかです。」、つるつるですと言うわけです。だからお父さんが私に触ったらすぐお父さんにわかりますよと。そうしたら、からかわれたと思って祝福されるどころか呪われますから嫌ですよと言うわけです。その呪いは私が代わりに受けてあげるから、私の言うとおりに行って獲っておいでと、母のリベカは言います。

そこでヤコブが獲ってきた羊を使って料理を作り、リベカはヤコブにエサウの晴れ着を着せるのです。15節にそのように記してあります。また、晴れ着を着させただけではなくて、やぎの毛皮で手と首のなめらかなところを覆い、料理を持たせました。ヤコブはお父さんのところへ行った時に、「お父さん。」と声をかけます。するとイサクは「おお、わが子よ。」、あなたはだれかと尋ねます。ヤコブは「私は長男のエサウです。」と19節で答えています。言われたとおりに料理を作ったから食べて私を祝福してくださいと言うのです。イサクは、ちょっと早いんじゃない？さっき行ったところなのにもう料理を持って来たのかと。野に行って獣を捕まえることができたのかと尋ねます。ヤコブは「あなたの神、主が私のために、そうさせてくださったのです。」とうそをつきます。そこでイサクはヤコブに言います。「近くに寄ってくれ」、本当におまえがエサウかどうかさわったらわかるからと。でも大丈夫ですね、そばに寄ってヤコブの手にさわると確かに毛深かった。首もそうでした。確かに見分けがつかない、これはエサウであろうと。でも、声が違うから本当におまえはエサウかと尋ねるのですが、なおヤコブは「私です。」、私がエサウですと。では、食べ物を私のそばへ持っておいで、私はそれを食べてあなたを祝福するからと。ヤコブは料理を持ってイサクにそれを食べてもらおうと近寄るわけです。イサクはおいでわかると考えたのです。そばに寄ってきたヤコブのにおいをかぐと、ああ、これはやっぱりエサウだと。27節の終わりに「イサクは、ヤコブの着物のかおりをかぎ、彼を祝福して言った。」とあります。本当に注意はしたのですが、目が見えなくなってよくわからない。リベカの入れ知恵によって、まさにヤコブは弟であるにもかかわらず、この長子の権利を得て、父の祝福を受けるのです。「ああ、わが子のかおり。主が祝福された野のかおりのようだ。神がおまえに天の露と地の肥沃、豊かな穀物と新しいぶどう酒をお与えになるように。国々の民はおまえに仕え、国民はおまえを伏し拝み、おまえは兄弟たちの主となり、おまえの母の子らがおまえを伏し拝むように。」(27-29節)、まさに弟の方が兄よりも高くされるといふ神様のリベカに対する祈りの答えが、ここでイサクによって祝福されたことばとして実現されたことを見ることができます。

4. エサウの恨み 30-45節

それが終わるか終わらないかのうちに入れ違いにエサウが帰ってきます。そしてそのことを聞いて非常に怒り、悲しみます。何とかヤコブになした祝福を取り消して、自分にしてほしいと父に訴えるのですが、それはできないとイサクはエサウに言います。「エサウは声をあげて泣いた。」と38節に書いてあります。イサクは彼に言います「見よ。おまえの住む所では、地は肥えることなく、上から天の露もない。おまえはおのれの剣によって生き、おまえの弟に仕えることになる。」、まさにヤコブに対してなした祝福のことばとは逆のことをエサウに対して言うのです。それでエサウはどう思ったか——、41節に「エサウは、父がヤコブを祝福したあの祝福のことでヤコブを恨んだ。それでエサウは心の中で言った。『父の喪の日も近づいている。』、もうすぐお父さんは亡くなりそうだから、その時にヤコブを殺してしまおうと考えたのです。

またそのことばをどこで聞いたのか、リベカに知らせる者がいたのでしょうか、エサウがヤコブを殺そうとしているよと。ヤコブを呼んで兄さんに気をつけなさい、殺されるよと。だから私の兄のところ逃げていきなさい、カランへ行きなさいと言うのです。

5. ヤコブ、カラン(パダン・アラム)へ 28:10-20

そしてイサクに何とかヤコブを兄のところへやるようにと話をします。そこでイサクはヤコブを呼びます。28:1「彼を祝福し、そして彼に命じて言った。『カナン(カナンの)の娘たちの中から妻をめとってはならない。』とあります。今住んでいるところから妻をめとってはだめだ、「パダン・アラムの、おまえの母の父ベトエル(ベトエルの)の家に行き、そこで母の兄ラバンの娘たちの中から妻をめとりなさい。」、すなわちいとこの中から奥さんを選べと言ったのです。「全能の神がおまえを祝福し、多くの子どもをおまえに与え、おまえをふえさせてくださるように。そして、おまえが多くの民のつどいとなるように。神はアブラハムの祝福を、おまえと、おまえとともにいるおまえの子孫とに授け、神がアブラハムに下さった地、おまえがいま寄留しているこの地を継がせてくださるように。』」、神様がアブラハムへの祝福としてなしたその契約、約束を継がせてくださるよと。そしてヤコブを送り出しました。

旅を続けて、ヤコブがあるところに着いた時、一つの夢を見ます。28：11に記されています。「そこで一夜を明かすことにした。」、横になって寝ている時に彼は夢を見た。どんな夢かというのと、「一つのはしがが地に向けて立てられている。その頂は天に届き、見よ、神の使いたちが、そのはしごを上り下りしている。」と。天から地に向けて降りているはしごを天使たちが上ったり下ったり。バベルの塔というのを私たちは思い出すことが出来ますが、バベルの塔は人間が神のようにと行って、この地上から天に向かって建てていった塔ですが、このはしごは天から下りてきたはしごのようです。しかも、天使たちがそれにつかまって上り下りしている様子をヤコブは見たというのです。「そして、見よ。主が彼のかたわらに立っておられた。」、夢の中で神様が彼のそばに立っておられた。そして言われます「わたしはあなたの父アブラハムの神、イサクの神、主である。わたしはあなたが横たわっているこの地を、あなたとあなたの子孫とに与える。」、「あなたとあなたの子孫」、だからあなたにも子孫が与えられるよということ約束された。しかもその「子孫は地のちりのように多くなり、あなたは、西、東、北、南へと広がり、地上のすべての民族は、あなたとあなたの子孫によって祝福される。」、アブラハムは地上のすべての民族はあなたによって祝福されると、神様によって祝福されましたが、ヤコブもこのように神様によって祝福されたのです。

さらに「見よ。わたしはあなたとともにあり、あなたがどこへ行っても、あなたを守り、あなたをこの地に連れ戻そう。わたしは、あなたに約束したことを成し遂げるまで、決してあなたを捨てない。』」、必ずこの約束を成就させる。あなたを見捨てることはありませんと、非常に大事なすばらしい約束をここでしたのです。ヤコブは目が覚めた時に、「まことに主がこの所におられるのに、私はそれを知らなかった。」と言って、その場所にベテルという名前をつけたと記されています。

6. ヤコブの結婚 29：15-30

そしてヤコブはさらに旅を続けて東の方へ行きます。29節に「東の人々の国へ」とあります。これはパダン・アラムのことです。カナンの地から見て、メソポタミア、東の方へ旅を続けました。

そして、井戸のあるところにやって来たのが29章の全般に記されていますが、その井戸でひとりの娘と彼は出会います。29：6「ヤコブはまた、彼らに尋ねた。」、「彼ら」というのはおじさん、ラバンのところで羊を飼っていた人たちなのですが、「あの人は元気ですか。」、ラバンおじさんは元気ですかと尋ねたら、「元気です」と言うわけです。「ご覧なさい。あの人の娘ラケルが羊を連れて来ています。」、ラケルは羊を飼っていたのです。しかも羊を連れてきている。そしてヤコブはこのラケルが連れて来た羊たちに水を飲ませたということが記されています。10節に「ヤコブが、自分の母の兄ラバンの娘ラケルと、母の兄ラバンの羊の群れを見ると、すぐ近寄って行って、井戸の口の上の石をころがし、母の兄ラバンの羊の群れに水を飲ませた。そうしてヤコブはラケルに口づけし、声をあげて泣いた。」とあります。本当に感極まったのでしょうか。あんなふうにお父さんを欺いて、お父さんをだましてやって来たヤコブでしたが、ここでいとこの娘、ラケルに会うことができた時に泣いたということが記されています。ヤコブもやはり人間だったなという一面を私たちは見ることができます。

そしてこのことをラケルから聞いて、ラバンはヤコブを迎えにやってきて自分の家に連れ帰るということが記されています。そして1カ月ほど叔父のラバンのところに滞在した時に、ラバンはこう言います。15節「そのとき、ラバンはヤコブに言った。『あなたが私の親類だからといって、ただで私に仕えることもなかろう。どういう報酬がほしいか、教えてください。』」、1カ月私の家に居候したからそろそろ働けよ、本当はそういう思いがあったのですが、非常に体裁のいい言い方ですね。そろそろ働いたら？働いた報酬は何がいいかなと聞くわけです。彼には「ふたりの娘があった。姉の名はレア、妹の名はラケルであった。レアの目は弱々しかったが、ラケルは姿も顔だちも美しかった。」と、対照的なふたりの姉妹だったことが書いてあります。「目は弱々しかった」というのは病気だという意味ではなくて顔を見た時に目が目立たないような存在であったと表現しています。それに比べてラケルは非常に美しかった。そして、「ヤコブはラケルを愛していた」というわけで、「私はあなたの下の娘ラケルのために七年間」働きますからラケルを私の嫁に下さいと言います。するとラバンはこう答えます。ほかの人にやるより、親戚のあなたにやった方がいいから私のところにいて7年間働いておくれと。そして7年間働きました。「ヤコブは彼女を愛していたので、……ほんの数日のように思われた」と記されています。もう待ち遠しかったのでしょうか。20節にそのように記されています。7年たちましたからどうぞ私の妻にラケルを下さいと言うヤコブに叔父のラバンは、では、みんなを集めてお祝いをしようと言います。22節「人々をみな集めて祝宴を催した。」と書いてあります。

そして23節「夕方になって、ラバンはその娘レアをとり、彼女をヤコブのところに行かせたので、ヤコブは彼女のところにはいった。」、ここを見ると、話がおかしいですね。ひょっとしたら聖書が間違っているのではないかと思われるかもしれませんが、決してそうではなくて、これはラバンの悪巧みです。姉の方のレアをヤコブの嫁にしようとしたのです。約束はそうではありませんでした。朝になってヤコブ

は気がつくのです。あれ、違う……。これは姉のレアの方だ。「何ということをお私になさったのですか。」と叔父のラバンに言います。私が7年間働いたのはラケルのためでした。どうして私をだましたのかと聞くと、ラバンはこの地方では妹が姉より先に嫁に行くことなんてあり得ません。姉の方が先に嫁ぐことになっているのです。だからレアをあなたの妻として差し出したのですと言います。そんなこと聞いていなかったですが、でもヤコブはどうしてもラケルと結婚したい。もう7年間働くからラケルを私の妻にしてくださいと言ってさらに7年間ラバンに仕えたと30節に記されています。そして結婚して、その間、この二人の妻と二人が使っていた女性、4人の女性から11人の子どもが生まれたことが聖書に記されています。この子どもが生まれるに当たっても、30章にいろいろと確執が記されています。

そして14年たってヤコブはラバン叔父さんに国に帰りたと言います。それが25節に記されています。私はそのために働いてきたのだから、「私の妻たちや子どもたちを私に与えて行かせてください。」と。当時は娘も子どもたちも父親のラバンの所属になっていた、所有物になっていたと言われていたから、実際は妻であり、子どもであっても自分のものではなかった。だから帰りたと言うわけです。でもラバンはそうは問屋が下ろさないと。27節に「もしあなたが私の願いをかなえてくれるのなら……。私はあなたのおかげで、主が私を祝福してくださったことを、まじないで知っている。」、いろいろなやりとりがありまして、あと6年間ラバンのためにヤコブは働くこととなります。この6年間にいろいろな出来事がありました。30章の後半に記されています。

7. そして20年後、ヤコブ、イスラエルと呼ばれる 32:22-30

そして6年たち、ヤコブはどうもラバンの家族の態度がおかしいのに気づきました(31:2)。その時に神様が「生まれた、あなたの先祖の国に帰りなさい。わたしはあなたとともにいる」からと言われます。そこでヤコブは妻と子どもたちを呼び寄せ、また飼っている動物を集めて帰ろうと言うわけです。そしてそのことがラバンにわからないようにこっそりと出かけていくと記されています。ラバンが後を追いかけてきて、一つのやり取りがありました。31:41「私はこの二十年間、あなたの家で過ごしました。十四年間はあなたのふたりの娘たちのために、六年間はあなたの群れのために、」、あなたの羊ややぎたちのために仕えてきました。「それなのに、あなたは幾度も私の報酬を変えたのです。」、10回も変えました。「もし、私の父の神、アブラハムの神、イサクの恐れる方が、私についておられなかったなら、あなたはきっと何も持たせずに私を去らせたことでしょう。」、そしてヤコブとラバンとの間にいろいろな会話が交わされましたが、円満解決してヤコブはふるさとを目指して帰っていくことになるのです。

32:1-2を見ると、「ヤコブが旅を続けていると、神の使いたちが彼に現われた。ヤコブは彼らを見たとき、『ここは神の陣営だ。』と言って、その所の名をマハナイムと呼んだ。」とあります。そして、帰っていく先に一つの不安があります。自分を殺そうとしたエサウが待っている。だからエサウに使者を送ったのです。「あなたのしもべヤコブはこう申しました。」、自分が長子の権を奪っておきながら、今あなたのしもべであるヤコブがこう言っています。ラバンのところにとどまっていたけれども、牛やロバ、羊、男女の奴隷をたくさん持っているからそれをご主人——エサウのことですが、あなたにお知らせしてあなたのご好意を得ようと使いを送ったと使者は伝えました。けれども、エサウは400人の人たちを連れて迎えにやって来るということをヤコブは聞きます。「ヤコブは非常に恐れ、心配した。」とあります。そこで群れをふたつに分けて、たとえエサウが来て一つの宿営を全滅させる、あるいは連れて行ったとしても、あと半分残っているから大丈夫と考えるのです。このように分けて自分としては最善の手を打ったわけですが、なおかつそれだけではなくて、群れを向こう岸に渡し場から移し、自分はひとりだけこちらの残ったのです。エサウが仮にふいにやって来たとしても大丈夫なように。32:22を見ると、「しかし、彼はその夜のうちに起きて、ふたりの妻と、ふたりの女奴隷と、十一人の子どもたちを連れて、ヤボクの渡しを渡った。」とあります。ヨルダン川のところからカナンの地へ渡るヤボクの渡し場から「彼らを連れて流れを渡らせ、自分の持ち物も渡らせた。」、そして「ひとりだけ、あとに残った。」と。

ところが残って一人だけになった時、「ある人」というのが登場し、「夜明けまで彼と格闘した。」とあります。その人は幾ら格闘してもヤコブに勝てなかった。それで「ヤコブのもものつがいを打ったので、その人と格闘しているうちに、ヤコブのもものつがいははずれた。」と書いてあります。幾ら格闘してもこの人はヤコブに勝てなかったと言うのです。それほどヤコブは格闘に強かったということを私たちは見ることができます。

この「もものつがい」というのは何かというと、「もも」というのは脚の上部の腰につながる部分で、「つがい」は関節です。リビングバイブルには「関節をはずして」と書いてありますから非常にわかりやすいのですが、このような部分を打たれて勝てなくなったと言うのです。確かにこのような表現が聖書にされていますが、ヤコブは本当に自分の力を過信しながら、またいろいろな手段を用いて自分の思いどおりにしながら今までやってきましたが、なおかつエサウを恐れていた。神様が、私があなたと

もにいるからと、あなたを守るからと言われたのにこうでした。でもこのようにして、その「ある人」が登場して格闘した時に、本当になるほどヤコブはこのように非常に傲慢で自我の強い、自己の強い者であるということをごらんになった。そこでこの「つがい」を打つことをしたというわけです。ヤコブの自我はここで打たれるということになるのです。その人が「わたしを去らせよ。夜が明けるから。」と言いましたが、ヤコブは「あなたを去らせません。私を祝福してくださなければ。」と離さなかった。その人はあなたの名前は何ですかと言うのです。その人は名前を知らなかったのでしょうか？知っていたに違いないのですが、ヤコブは「ヤコブです。」と答えます。私は押しのける者です、私は策略に長けた者です。本当に兄のかかをつかんだ者です。長子の権を策略をもって奪った者です、ヤコブです。そこでその人は「もうヤコブとは呼ばれない。イスラエルだ。……神と戦い、人と戦って、勝った」と言います。「イスラエル」というのは神の王子、または神とともに支配するという意味です。あの「サラ」という、ヤコブにとってはおばあさんですが、同じことばが1カ所用いられています。「イ」というのは三人称単数未来、「～するだろう」、「スラ」というのは「神と争う」とか「支配する」という意味です。「エル」は「神」という意味です。このようにして、イスラエルとして名前をいただいたのです。ヤコブは「その所の名をペヌエル（神を見た）と呼んだ。」と。神の御顔という意味の名前をつけた。神を見た者は生きていくことができないと今まで言われているけれども、私はいのちを救われたという意味で感謝してその名をつけたのです。

やがてヤコブが目を見て見た時に、エサウが400人の者を引き連れて来ましたが、エサウが思っていたように腹を立てていなかったということを見ることができました。そして生まれ故郷に帰っていくと、聖書は33章で教えています。

Ⅱ. 新約聖書の解き明かし

1. 神はヤコブを愛し、エサウを憎まれた ローマ9：6－13

さて、このようなヤコブでありました。本当に人間的にはどうしようもないような、強情な、傲慢な、いろいろな策略に長け、人をだます、まさにこれは私たちそのものではないかと聖書は教えるのです。新約聖書ではどのように言っているかということ、ローマ9：6－13で神は「ヤコブを愛し、エサウを憎」まれたとあります。一体どういうことなのかと、私たちは不思議に思いますね。この憎んだということばは、比喩的なものというか、愛するの反対のことばとして使っていて、エサウに対して比較的大切に取り扱わなかったという意味だと詳訳聖書では説明しています。ここで言われていることは神のみことばが無効になったわけではない、神のみことばというのは単数形が使われているので、聖書全体のことではなくて、神のご計画、すなわちイスラエル民族に対する神のご計画が無効になったわけではない。あのアブラハムやイサクに対して行われた神様の計画が無効になったのではない、あくまでそれは有効に生きていて、なおかつヤコブに対してもなされた。どうしてかということ、イスラエル民族から出る者がイスラエル、神様の民、詳訳聖書では真のイスラエルと表現していますが、真のイスラエルではないということです。だから「肉の子どもがそのまま神の子どもではなく、約束の子どもが子孫とみなされるのです。」（8節）というわけです。だから幾ら肉体的に血がつながっているからといってその約束がなされるものではないと。神様が契約された者が約束の子孫となるということを新約聖書はここで言っています。神様はまだ生まれていない前からなされた神の選びのご計画の確かさ、それは何が理由かということ、ヤコブの行いや利口さではなかった。「行ないにはよらず、召してくださる方による」（11節）と書いてあります。すなわち神様によってなされることなのだというのです。

2. エサウは俗悪な者 ヘブル12：16

ヘブル12：16にエサウは「長子の権利を売ったエサウのような俗悪な者」と記されています。卑しくはなはだ劣悪、目先の物事、一杯のあつものに目がくらんで長子の特権をヤコブに売ってしまった。これは霊的なことに全く関心がなく、今生活している、その周りのことに気を奪われて大事なことを忘れている、そういうことを教えています。

3. 全ての事は人間の努力によらず、憐れんでくださる神にある ローマ9：16、エペソ2：8－9
まさに人間が幾ら努力をしてもだめだ。神様によって事がなされるということです。

4. 私たちはどのように歩むべきか ピリピ3：13－15

ピリピ3：13－15「兄弟たちよ。私は、自分はずでに捕えたなどと考えるはしません。ただ、この一事に励んでいます。すなわち、うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み、」、うしろのものを忘れ、ただ前を向いて進むのだと。「一事に励む」、ただ一つのことを熱望してと詳訳聖書は言っています。こういう歩み方が大事だと。一心にそのことだけを願って歩むということです。「ですから、成人である者はみな、」、私たちは信仰者として成人しているかどうかということです。もし皆さんがきのうきょうイエス様を信じたばかりの者ではなくて、信仰生活が長い成人されているクリスチャンであれば、「このような考え方をしましょう。」と。信仰生活が長かったからと言って決して大人になるという

意味ではないのですが、このような考え方をしましよと教えています。しっかりとある一つのことに集中して、熱中して歩いていきましようと言っているのです。ヤコブのように策略をめぐらさない、どんな危険があったとしても、考えられるだけの防御手段を講じて安心している。それは違うよ、大事なのは神様に委ねて、物事に対処することではないですかと。

5. 私たちはイスラエル I ペテロ 2 : 9

私たちはイスラエルだと、I ペテロ 2 : 9 では教えています。何を言っているのかというと、「あなたがたは、選ばれた種族、王である祭司、聖なる国民、神の所有とされた民です。」と書いています。「あなたがた」、クリスチャンのことですね。イエス・キリストを救い主として信じた皆さんは、こんなものですよと言うのです。「選ばれた種族」なのだと言うわけです。私たち地上にあって国籍は違いますが、イエス・キリストを信じて本当のイスラエルとして扱われるということを教えています。しかも「王である祭司」、あるいは祭司である王。王にしてなおかつ祭司としての務めをしている者だ。そして「聖なる国民」なのだ。「聖なる」ということばは「分離する」という意味です。だから罪から、汚れたものから分離して、神に属した者となるということを教えているのです。ここでは「国民」というのは複数形を使っていますので異邦人を意味します。イスラエル民族以外の民は異邦人ですが、この異邦人であるあなたがたもイエス・キリストを信じた時にあのイスラエルと同じ民族になるのだということをご約束しているのです。「神の所有とされた民」ということです。私たちはキリストの花嫁としての教会、そしてキリスト者です。「やみの中から、」、光の中から招かれた者だと言っています。

6. 神はいつも私たちとともにおられる マタイ 28 : 20

そして神はいつも私たちとともにおられるとマタイ 28 : 20 で言われています。アブラハムに、イサクに、ヤコブに約束された神は「見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。」と約束されています。「います」ということばはギリシャ語の「エイミ」ということばが使われていますが、今現実に存在されている、今まさにそばにおられるという意味のことばです。

私たちは本当に日常生活の忙しさにかまけて、どうしても目先のことにとらわれがちです。そして病気のこと、あるいは人と人との関係や経済的なこと、学校や就職のことを心配します。でも、神様は「わたしは……あなたがたとともにいます。」、どこにでもおられると言われた。アブラハムの神、イサクの神、そして神様はやがてヤコブの神と言われます。この神として顕現される神様とこのように関わり合える。ヤコブは人間的に見たら鼻持ちならないような性格の持ち主でしたが、少しずつ神様によって変えられ、もものつがい被打れた時に本当にびっこを引いて歩くようになった彼が変えられて行くありさまを見ることが出来ます。私たちもやはりそうでなければならぬと言うのです。日常生活の忙しさに目を奪われてはおられないでしょうか。どうぞいつもおられる神様を見上げて歩いていただきたいと思えます。

もしまだイエス様を信じていない方がここにおられたとしたら、イエス・キリストを信じて与えられる救いはあなたの行いによるのではないということをご覚悟いただきたいと思います。どんなに賢く、あるいは上手に働いたとしても、神様はだからあなたを救うということは決してありません。大事なのはあなたが神様に救っていただきたい、私をあなたにお委ねしますから私を救ってくださいという、その決心なのです。